

117期通信

北海道小樽潮陵高等学校 1 学年通信
令和 2 年 9 月 16 日 (水) 発行 第 13 号
潮陵 1 学年団

☆特別号 NO 1

9 月 10 月の学年通信は「特別号」を計 5 回発行します。1 学年の先生方に自らの経験や時事問題等について書いてもらう予定です。進路を具体的に考えるきっかけになればという思いから、この特別号を企画しました。「特別号 NO 1」の今号は、西村先生（音楽担当）に書いて頂きました。それではご覧ください。

芸術の秋、とはいうものの、音楽ならば、生演奏の迫力さや繊細さを楽しむ機会はほぼありません。これまで通りに楽しめるのは、もう少し先になりそうです。

さて、私の話ということで。小 5 から吹奏楽をしていたことから、将来は音楽に関わる仕事をしたいと漠然と考えていて、高校時代は、音楽大学進学を考えていました。両親には反対されませんが、紆余曲折の末、「教員免許を取るなら」という条件で認めてくれました。

大学を選んだ理由は、大学講師だけでなく、東京でプロのオーケストラ奏者としても活躍されている先生に師事したかったからです。音大受験は学力よりも、主に専攻する楽器について、一定の演奏技術が必要です。今でこそ受験科目は少なくなりましたが、当時は主専攻の他、ピアノ、初見視唱（その場で初めて見た楽譜を正しい音程やフレーズ感で歌う）、聴音（ピアノで弾かれたメロディーや和音を五線譜に正しく書き取る）、楽典、一般教養など幅広く、受験日程は 1 週間の長丁場。集中力も精神力も試されているようです。

私は高 3 の春から本格的な受験対策を始めましたが、音大を目指すには、スタートはあまりにも遅すぎ、北海道で師事した先生には、最初のレッスンで「浪人は覚悟しなさい」と言われてしまいました。何としても現役合格したかったので、主専攻のレッスンは札幌まで往復 6 時間程かけて月 2～3 回通い、部活動の後にピアノや聴音などのレッスンが週 1～2 回、そのための練習や勉強など、高 3 の 1 年間は、目まぐるしく過ぎていきました。努力の末、何とか現役合格できましたが、それは次のスタートラインに立っただけで、本当の挑戦は大学入学後に本格化するのでした。

音楽大学はプロの演奏家・音楽家を養成する場です。上下関係はありますが、こと演奏に関しては完全実力主義。下の学年であっても上手なら対外的な演奏に抜擢されるチャンスがあるし、上級学年であっても実力がなければ、日の目を見ることはできません。また、首都圏の大学ということで、演奏会の回数や音楽についての情報量は、北海道とは比べものにならないほどたくさんあり、大きな刺激になりました。4 年間、成功したことも、辛酸を舐めたこともありました。大学で得た経験や出会った人との繋がりが、今では大きな財産です。

芸術に触れると、何だか心が洗われる感じがしますね。これまでに素敵な体験をした生徒は、たくさんいるのではないかと思います。良いものを見たり聴いたり、あるいは体験・共有したときに、素直に受け止め、何が良かったのかを感じ取れる「感受性」は、これから自分自身がまっすぐ成長していくには大切なものです。私が教員になったとき、ある先輩音楽教員が「音楽は心の栄養」と話されていました。音楽を始めとする芸術には、人の心を動かす力が宿っています。私はこれらを、芸術に触れること・体験すること・挑戦することを通して感じ取って欲しいと思います。

次号は、道見先生（数学担当）の予定です。お楽しみに！